

偽神紀

其の一

A+B=C なら
C-B=A だとイエスは言った。
ほんとかよ、そんなに簡単？
と、ユダは訊いた。
途中でAが変わったら
一体どうなるんだ？
世の中って、そんなもんさ。



ハイイ、世田谷ネコのタマだよ。懲りずに読んでるあなたは偉い！

これから書くテキストにネコは出てこないの。人間サマのお話。どうやって記録したかって？ 心配御無用。当時、カナンの動物たちはコトの成り行きをリアルタイムで見てたんだ。クロ、ハナポチ、キジシロの報告を聞いた神様は、即座にベツレヘムあたりのナザレ地方のあちこちにマイク付きビデオカメラを取り付けたの。なんと六万五千五百三十六台。カメラのデータは即時にアップロードされて、クラウドサーバーがリアルタイム配信してた。でも、カメラが多すぎてどれを見ればいいのかわかんないし、仕事してて名場面を見逃した動物もいたから、毎日面白いとこだけを一時間に編集した『今日のナザレ』っていう番組もストリーミング配信されてたんだ。新版の配信が始まる夜八時には、水浴び場がガラガラになるくらい人気があったらしい。見られてる人間は、見られてるなんて知らないから本性丸出しで好き勝手なことやってた。読めばわかるよ。だけど残念ながら元の映像と音声のデータはもう残ってないんだ。『今日のナザレ』からダイジエストで書き起こしたと思われる線文字B文書しかないの。まあそれで充分だけどね。原典はキプロス連邦トルコ共和国のネコペディアで読めます。

んじゃ、どーぞ。

蔵小路タマ

タワシ騒動

馬小屋の三軒隣に東洋人のような顔立ちの老人が住んでいた。いつも不景気な古本屋のじいさんでイザヤベンダサンと名乗っていたが、なにやらモノも書いてるようで、山本七平というペンネーム風の表札も出していた。

イエスが生まれたと知ると、イザヤは一ドラクマ分の焼きとうもろこしを持って祝いに駆けつけ、あらゆる言葉で祝福し、思い付く限りに褒め上げた。ヨセフことアダムと、マリアことイブは悪い気がせず、イザヤを最良の隣人と思い込んだ。

イザヤは飼葉桶の藁に手を触れ「少し湿っているようだ」と言い、「乾いた新しい藁に取り替えてあげる」と申し出た。アダムが「お願いする」と言うのと、イザヤは藁をすぐに取り替え、古い藁は「始末するね」と持ち帰った。

これは三匹のネコが訪れた次の日のことであつた。

アダムが期待したとおり、神の子の見物人は続々

と押しかけた。最初の何日かは街道でピラを配って客引きもしたが、噂が広がるにつれて客は自分からやって来て、見物まで三時間待ちが当たり前になった。拝観料は、ぼったくりの一タラントだったが文句を言う人は皆無だし、拝観料以外にお布施を置く人もたくさんいた。

「ほら、おれの言ったことに間違いないだろ。みんな奇跡を見たいんだ」

「あんた、頭いいね。こんなにお金が入るなら田舎暮らしでもいいや。そのうちバビロンに休暇用マンションでも買おうね」アダムとイブは有頂天だった。

ひと月も経った頃、三軒先の隣が騒がしいのにアダムが気付いた。イエスの馬小屋より人だかりしている。人々は先を争って何かを買っているようだ。イブが見に行くと古本屋は土産物屋に改装されていて、看板には『神の子タワシ専売所』とあり、イザヤが店の中で藁を小さい束にしたタワシを売っていた。壁にはイエスの似顔絵や、イザヤが赤ん坊を抱いている写真が貼ってある。

「はいはい、売り切れないから押さないで。一個一ドラクマだよ。聖なる飼葉桶の藁タワシ、神の子が

生まれたときに敷いていた藁で作った神聖なタワシ、ひとこすりで王道成仏保証つきだ」タワシは飛ぶように売れていた。

アダムは怒った。イザヤの野郎め、親切ごかしに藁をかつぱらつて、無断で神の子商売始めやがった。神の子で儲けるのはおれたちだけでいいんだ。くっそお、どうしてくれよう。とにかく腹が立ったので、まずは怒鳴り込み、大声でイザヤを呼んだ。

「おお、隣人ヨセフ、お互いに商売繁盛で嬉しいね」イザヤがにこやかに出迎えた。

「こらイザヤ、誰に断つて便乗商売始めたんだ。挨拶のひとつもねえじゃねえか」

「挨拶が必要だったかね。これは失礼した。歳をとると気が利かなくなつてな。じゃ、あらためて、商売始めさせてもらいます。よろしくです」

「うるせえやい。こちとら、いいとも悪いとも言うてねえぞ」

「まことに失礼だが、物を売するのに誰の許可も要らんとと思うが」

「何をとぼけたことを。売るものにもよるよ。忘れたらしいから言つてやるが、神の子イエスはうちの

子だ。それを勝手に使いやがって」

「まあな、マリアが生んだのは確かだが、イエスは神様の子だと思うがね。神は誰のものでもない。とするとイエスは誰のものでもない。そうならんか？」

アダムはさらにムカついた。イエスを神の子に仕立てたのは自分のアイディアで、それをお前なんかに使われてたまるか、と喉まで出たが、言つてしまつたら実も蓋もない。ぐっと思い止まった。

「下手な理屈をこねるんじゃねえ。老いぼれの死に損ないめ。百歩譲つてお前の言い分が正しいとしても、マリアが産んだんだから、半分はおれたちの権利だ。違うか？」

「そうさなあ、ふた親がなければ子はできんからな。わかつた。半分は認めるとしよう。それでどうしたいのだ？」

「どうしたいつて言われたつて、別に考えちゃあこなかつた。どうすればいい？ そうだ、コミッシヨンを取つてやろう。」

「本来なら商売やめると言うところだが、同じ町内のよしみで、分け前を寄越せば見逃してやる。神の子タワシ一個につき半ドラクマ払え」

「ちよつと強欲じゃないかね。神の子タワシの売値は一個一ドラクマだよ。半分も持つてく気かね」
「そうだ、悪いか。イヤならイヤでもいいんだ」
「仕方ない。わかつたよ。今、証文を書くから待つてくれ」

イザヤはあつさりと要求を呑んだ。アダムは、もう少し吹っかけるべきだったな、と後悔した。

「さあ、これが証文だ。一応読んでくれるか」イザヤが書いてきた紙をアダムは読んだ。

『私イザヤベンダサンは隣人ヨセフに対し、神の子イエスの誕生時に飼葉桶に敷いてあつた藁を使用した神の子タワシ一個の売り上げにつき半ドラクマを支払うものとする』

「うまく書けるじゃねえか。これでこそ隣人関係がうまく行くつてもんだ。毎日集金に来るから、夕方にはカネを揃えとけよ」

「もちろんだとも。いったん約束したからには命に代えても守る。毎日、かなりの大金になるな」

「でかい袋を持つて来るとしよう。じゃ、さいなら」
「あつ、ヨセフ、ちよつと待つてくれるか」

「なんだ？」

「本当はこつちから出向くべきなんだが、ついでで悪いが、こつちからの請求書も受け取つておくれ」
「請求書？ なんだよ、お前に借りはねえぞ」
「いやいや、忘れてもらつては困る。入れ替えた新しい藁の代金だよ。ほら、藁が湿つぽかつたから、新品の極上の藁に取り替えただろ。その代金」
「えつ、あれはお前が勝手に交換したんだろ。カネを取るのかよ」

「もちろんだとも。この世には無料のものなどない。それにあの藁はロードス島産の光り輝く藁といつて、なかなか手に入らないものなんだ。目出度い話だから原価でいいよ、二万タラントだ」

「この野郎、ふざけたことを。藁が二万タラントなんて聞いたことねえぞ。それに、お前は古い藁を勝手に持つて行つたじゃないか。それで商売してるんだろ。新しい藁が二万なら古いのも二万だ」

「これは妙なことを言うね。私は勝手にとか無断でとかで持つて行つたわけではないよ。あのとき、古い藁を『始末するね』と言つて持ち出したはずだ。お前たちに異議はなかつた。つまり私は古い藁を無

償で譲渡されたことになる。それを今になって無償ではなく二万と言われても困るなあ」

「この泥棒野郎。お前みたいのを大嘘つきの詐欺師っていうんだ」

「まあまあ、何と呼ばれようと構わんが、新しい藁の代金、二万タラントは忘れんように」

「払わなかったらどうする？」

「隣人同士、払わないなどという不義理はないと思うが、そうだなあ、仕方がなければ出るるところに出るかな。私はヒマだし」

ヨセフことアダムにとつて、一番困るのが『出る』ところ『だった。イブのカード詐欺もばれるだろう、競馬のノミ屋から刺客も来かねない。

「いいよ、わかつたよ。でも、すぐには払えないからね。それと、神の子タワシの半ドラクマとは別の話だからね」

「もちろんだとも。勘定をいくつも合わせるのはトラブルの元だ」

どうも気に入らない。どこかヘンなのだが、どこなのかわからない。このまま引き下がるのはシヤクに触る。一発ギャフンと言わせたい。

かつたからだ。

翌日の夕方、アダムは特大の皮袋を持ってイザヤの店に行った。皮袋は小額のドラクマ硬貨でいっぱいになるはずだ。

「集金でーす」アダムは陽気に声をかけた。藁の一件はタワシのコミッションを取り上げた後、ゆっくり切り出せばいい。

店の奥からイザヤの息子が出てきた。啞え煙草で戦闘服を着て白い鉢巻を締めている。どこからどう見ても立派な不良だ。息子の名前はユダというらしい。彼はアダムを上から下までなめるように見てから「座つてろ」と縁台を顎で差した。アダムは殴られる前に座った。

店はまだ混んでいた。タワシを十個以上まとめ買いくする人たちを見ながらアダムは待った。

かなり待たされて、出直してこようかと思ったとき、イザヤが店の奥から紫の袱紗で包んだものを手にして出てきた。そうか、ドラクマ硬貨だと大量で持ち切れないからタラント金貨に換えたんだ。アダムはニンマリした。

「最後にひとつ訊くけど、新しい藁がロードス島とかの藁だって、どうやってわかるんだ？」

「そのことか。簡単だよ。なにしろ貴重品の藁だから、藁の一本一本のどこかに必ずメイドインロードスと書いてある。よく見ればわかるさ」

まったく釈然としない気分だ。ネジ込みに行ったはずが借金を作ってしまった。どうにも腑に落ちない。まるでスツキリしない。まあそれでもタワシ一個で半ドラクマは悪くないな。一年もしないうちに二万タラントはチャラになるだろう。

でも待てよ、本来なら二万タラントなんて払う必要はないんだ。どうにかして払わないで済む方法はないかな、と思案投げ首しているうちに、良いことを思い付いた。

アダムは徹夜で藁を調べた。一本でもメイドインロードスと書いてないのがあつたら「ニセモノだ」と言いがかりを付けて、二万タラントを踏み倒すつもりだった。しかし、飼葉桶ひとつ分でも藁は大量にあつて、夜が明けるまでに半分も調べられなかった。それでもアダムはニヤニヤしていた。調べた藁のどの一本にもメイドインロードスとは書いてな

「どうもお待たせして」イザヤは微笑みながら言った。「これが今日の方です」

アダムは袱紗を受け取り、おもむろに開いた。まぶしい金貨が出てくると思いきや、出てきたのは二個のドラクマ玉だ。

「二ドラクマ？ どういうことだよ？」

「今日のコミッションですよ。隣人同士の信用取引ですから領収書は要りません」イザヤは答えた。

「今見てただけでも三十個は売れてたぞ。丸一日なら千個はかたいだろ。それがどうして二ドラクマぼっちなんだ」

「ですから、契約にある神の子タワシは四個売れました。だから二ドラクマ」

「この野郎、いけしゃーしゃーと嘘つきやがって。ほら、今だって五個買つてる客がいるだろう」

「これは困ったお人だ。誰が隣人に嘘などつくものですか。きのうの契約書をお読みになったでしょ。私は契約通りにしているだけです」

「契約通りだと？ どこがあ。売り上げの半分寄越すはずじゃねえのか」

「えっ、そんなこと書いてありましたっけ？ 私は

たしか、飼葉桶に敷いてあった藁を使用した神の子
タワシ、と書いたと思いますよ。違つてたかなあ」
「そうだよ。飼葉桶にあった藁を使つてるから神の
子タワシだろ」

「いえいえ、違います。そんな滅相もない」
「なんだとお？」

「あのねあなた、いくら飼葉桶が大きくても、藁の
量なんてタカが知れてるでしょう。じゃんじゃん
使つたら三日もちません。しかし神にすがりたい
人はたくさんいる。できれば全員に広げてあげたい。
それが善行というものです。そこで致し方なくあち
こちから藁をかき集めましてね、みんなで気持ち
込めて作つてるわけです」

「じゃああなたにか？ 神の子タワシは二セモノだつて
いうわけか？」

「人聞きの悪いこと言わないでください。二セモノ
もホンモノもないんです。買った人が『ありがたい』
と思えば、それは真正正銘のホンモノです」

「そんなの盗人のたわごとだぞ。みんなは神聖な藁
が入つてると思つて買つてるんだ。入つてなきや詐
欺だろ。大衆を欺く大罪だ」

よ。せっかく運が向いてきたのに、こんな馬鹿に邪
魔されてたまるか。

「そうでしたか。小さい赤ちゃんもいることだし、
悪い方角には行かないことですね。君子危うきに近
寄らずだ。はっはっは」

「で、なんだっけ、そうだ、二ドラクマつてどうい
うことさ」

「それはですね、私どもとしても、できるだけ大勢
の方々に安心立命の境地を味わっていただきたいの
で、いくつかには優先して飼葉桶の藁を入れていま
んです。私どもの良心と受け取っていただければあ
りがたいのですが。それが今日は四個だったのです」

もう少し喧嘩したかったが、またマリアの散歩を
持ち出されるとコトだし、タワシについては、なん
となく負けたみたいなのがしたから、ここは引き下
がるしかなかった。

「いいよ、わかつたよ。二ドラクマで勘弁してやる」
「さすがに良き隣人だ。物分りがいいですね。明日
もまた集金に来てくださいますか」

「明日また？ あのさあ、たつた一ドラクマやそこ
らで毎日来るのは面倒だぜ。月に一度にまとめない

「おやおや、いつから大衆の味方になつたんでしょ
う。金儲けをしたければ大衆を相手にするしかない。
大衆を相手にしなければ金儲けはできない。こんな
簡単なこと、おわかりにならないか」

「おめえに教えてもらわなくてもちゃんとかかつて
らあ。だがな、いくら善行でも騙すのは良くねえと
思わねえか」

「それは、騙したのがバレたときには良くないです。
永遠にバレなければ問題は無いわけで。そうそう、
マリアさんはお元気でしようか？」

「なんだよ急に。ああ、元気だよ。ピンピンしてらあ」
「それは結構。元気が何よりですからね。いえね、
最近マリアさんが夜中の散歩に出掛けないから、具
合でもお悪いのかと思つて。街道のほうに毎晩お散
歩されてましたから」

「あつ、その件ね。なんかマリアが言うには方角が
悪いつて、それで街道には行かなくなつたらしくて、
あれは風水なのかな、とにかく街道には行かないん
だよ、うん」

このじい、どこまで知つてやがるんだろう。へ
タすると全部暴かれるかもしれない。また夜逃げか

か？」

「いや、それはよろしくない。売り上げは毎日ある
のですから、お支払いも毎日で」

こんなゲスの顔を毎日見るのかよ。嫌がらせなの
はみえみえだが、あきらめたらこっちの負けだ。

「わかつた。毎日夕方来るよ。それでさあ、あのロー
ドス島の藁のことなんだけど」

「ありがたいですね。二万タラントお支払いくださ
るとは」

「そんなこと言つてねえ。昨日の夜、よっぴいて藁
を調べたぜ」

「どうもご苦勞様です」

「ああ、おおいにご苦勞だつたよ。ところが、どこ
にもメイドインロードスなんて書いてなかった。ど
の一本にもどの葉っぱにもな」

「はて、それは異なること。隅から隅までご覧になつ
た？」

「もちろん。おかげでまた目がチカチカすらあ」

「ヘンですね、そんなことないんだが。あつ、そうだ、
少々お待ちください」イザヤは奥に入り、なにやら
分厚いカタログのようなものを持って出て来た。

「ええと、ロードス産品つと。ありました、これだ。なになに、ふむふむ、ああ、そういうわけか。これは申し訳なかった。ヨセフさん、謝ります」

「そうだろ、やっぱロードス産じゃなかったら」

「いいえ、紛れもなくロードスの藁ですよ。あの藁は非常の高価になってしまつて誰も買えなくなったのです。そこで少しでも安くしようとして経費節減して、今年からメイドインロードスと書くのをやめたそうです。ああ、これで納得した。よかつたよかつた」

「ちつとも良かあねえけどな」

「どうしてですか？ 何も書いてなければ、ロードスの藁でも古いのじゃなくて、最新の藁つてことですよ。最良産地の最新の製品です。あなたは運がいいですね」

アダムはきのう以上にモヤモヤしながら家に帰つた。口喧嘩なら誰にも負けない自信はあるが、どうもイザヤとだけは相性が悪い。いつの間にかイザヤのペースになつてしまふ。どこかにトリックがあるはずなのだが、喧嘩の最中に見つけるのは難しい。いずれ刃物でケリをつけるしかないのかなあ。

十五年後

それから十五年。馬小屋とタワシのお陰でベツレヘムは大きな街に成長していた。いまやナザレ地方の中心市街の感があり、カジノ、ホテル、酒場、売春宿、射的、競馬場、競輪場、パチンコ等々、娯楽施設は全部揃つていた。そして、歓楽街のボスはイザヤベンダサンで、実質的なオーナーでもあった。

ヨセフとマリア、ことアダムとイブも商売を広げていた。馬小屋は『生誕記念館』になり、専門のガイドが見物客にイエス生誕の物語を名調子で聞かせていた。神の子シヨは、馬小屋の隣に作った二千人収容の大ホールで連日三回上演されていた。シヨは三部構成の二時間で、第一部はアダムが自分の趣味で駆り集めた美少女四十八人による天国の場。神様が一人子を地上に遣わすまでの話を、歌あり踊りありのきらびやかな演出で再現していた。場の最後には四十八人が白い翼を付けて一斉に宙乗りし、観客の頭上を舞い踊る名物シーンだ。

第二部は打つて変わつて神の子生誕の場になり、

馬小屋に戻ると神の子シヨの最終回が神秘的に演じられていた。赤ん坊は本物だが、ヨセフとマリアは旅回りの役者だ。めっちゃ臭い芝居だったが観客はみな涙を流している。なるほどなあ、ホンモノと思ひ込ませればそれでいいんだ。イザヤの言い分にも一理あるな。

「それで、イザヤのじじいはどこまで知つてるんだろうねえ」イブが不安そうに言った。

明かりを落とした馬小屋で、二人は心配でたまらなかつた。

「わからねえよ。最悪のことまで考えねえとダメかもな」

考え込んでいたイブの顔がパツと明るくなった。

「大丈夫だよ、おまえさん。イザヤはばらしつこないよ。もし神の子がニセだつて知れ渡つたら、神の子タワシも売れなくなるだろ。そんなこと、すると思ふ？」

「そうか、ほんとにそうだ。あの業突く張りが儲け口をむざむざ捨てるわけねえもんな。これで安心して眠れらあ」

専属の俳優が重々しく荘厳に演じた。なお、生誕の場に居合わせたのがネコ三匹では、いくらなんでも説得力がないということで、人間の博士三人に置き換えられた。後世、一部の幼稚園や小学校で演じられる『聖劇』のルーツはこれである。

本物のイエスは第三部に登場する。軽妙なトークで賢さをアピールし、観客の中に病人がいればステージに引き上げ、その場で全快させた。医療行為に飽きると、イエスは一大イリュージョンシヨを繰り広げた。空中遊泳、自己消滅、胴体ノコギリ切断など、血湧き肉踊る華麗なシヨだった。

もつとも、物心付いたときからチャホヤされて育つた少年イエスは、一日に三回も出番があるのを嫌がった。「スターじゃなくていいから、普通の少年に戻りたい」などと口走り、目を放すと歓楽街へ行つてしまった。仕方がないのでアダムは街外れに住むジャーニーという男に頼んで美少年を調達してもらうのが常だった。

そんなこんなで、ベツレヘムの経済はアダムとイザヤに握られていた。しかし二分されていたわけではない。イザヤのほうに圧倒的に大きな資産を持つ

ていた。当時、イザヤは世界一の金持ちだったに違いないが、それでも以前と同じ質素な服をまとい、道に落ちていた使えそうなものは何でも拾った。一方アダムは豪邸を建設し、百人乗りの豪華ボートを購入し、もちろんバビロンに別邸を構えて美食と美女に明け暮れていた。どんなに稼いでも使えば溜まらない。アダムの資産は噂ほど多くなかった。

イザヤはとにかくカネを貯め、増やした。まず、神の子タワシで儲けた金で世界中の優良なブドウ畑を買いまくった。ついでに世界中の名のあるワイン醸造所も全部買った。教会のミサで使われるぶどう酒があまりにもまずいから、自分がおいしいのを献上するため、という名目だったが、しかしその後、一本でも献上された記録はない。

ワインビジネスは当たり前として、カネは何倍にも膨らんだ。次にイザヤは、そのカネをあちこちの王様や地域ボスに貸し付けた。国土や支配地域を担保に取って貸した。これはつまり、貸した相手の国を支配することに他ならない。そういった国で、たとえイザヤが悪事を働いても、警察や裁判所は手を出せなくなる。何かでモメて「借金返せ」とか「利息

を上げるぞ」と言われるのが怖いからだ。イザヤはそういう国々にダミー会社を沢山作り、租税回避地にし、以後どこにも税金を払っていない。

さらに策を講じて、それらの国々が戦争を始めるように仕向けた。戦争になれば国のカネが足りなくなつて、もつと借金をするからだ。イザヤはいくらでも貸した。ついにはカネだけでなく、武装した兵士の集団までも貸し出した。これが世界最初の傭兵である。傭兵業はとてめ利益率が高かったので、専門の会社『黒水会』を作った。後世に現れるブラックウォーター社の基になった会社がこれだ。

ときには戦争をしている双方に黒水会スタッフを派遣することもあったが、問題はまったくなかった。傭兵などいくら死んだところで、わずかな一時金で済むからだ。そして、いつの間にかイザヤがいなければ戦争はできないという暗黙の事実を全国家が認めるに至った。

そのころになると、どの国の兵器もすべてがベンダサン商会製になっていった。弓矢から盾、鎧、槍、超大型投石器など、ありとあらゆる軍事用産品があり、単品売りもするけれど、買いやすいように小隊

単位、中隊単位のセットもあった。購入に現金は不要で、王様のサインと国土の担保証書があればよかったのも売り上げを伸ばした要因だろう。

ところで、イザヤの子のユダは、三十歳になつてもまだグレていた。世の中がどうにも面白くないのだ。自分の居場所などどこにもない気がする。何が気に入らないのか、具体的には自分でもわからないから、ひたすらグレるしかない。毎日朝から酒を飲み、女郎屋で寝泊りして、家には寄り付かなかった。もつとも、酒場にしても女郎屋にしても、すべて父の持ち物なのは百も承知している。それも気に入らないのだが、どう足掻いても逃げられない。

もし俺がイザヤの子ではなく、どこかの貧民の子だつたら、こんなに苦しまなかつたらう。父親を越えることなど簡単にできそうだからだ。懸命に働いて父親の面倒を見ることもできただろう。でも実際は、イザヤという父を越えるどころか近付くことさえできない。良い悪いは別として、巨万の富をたつた十年程度で手に入れ、誰にも一度も負けなかつた男だ。どう対応していいのかわからないし、自分に、

父がしたこと以上の何ができるのか、まったく見当も付かない。だから生きている時間はすべてヒマつぶしで、酒を飲んで騒ぐしかない。

つまりは極度のファザコンと、押し潰されそうな劣等感の塊といえる。しかし別の面から見れば、そういう感性を持ち得るユダは、もしかするとかなり『いいやつ』なのかもしれない。

少年イエス

ある日、まだ昼前なのに酒場で大暴れしている若者がいた。泣いて暴れて、手のつけようがない。イエスだ。

「ああ、これがただの運命ならあきらめましょう。神が決められたことなら受け入れましょう。しかし、この町を包み込む強欲という強風に僕たちの愛が吹き千切られたのなら、たった一個の日干し煉瓦でさえ風除けを築けなかった僕自身を恨むしかない。ああ、いつそ死んでしまいたい。神の子とて死ねるのだ。誰か、慈悲があるなら短刀を！」

ユダは近付いて「落ち着けよ。まあ座れ。話を聞こうじゃないか」とやさしく言った。歳が離れていることもあって、それまで親しく話したことはなかったが、二人は隣人であり、挨拶程度は交わす仲だった。

「ああ、ユダさんか。僕はもう死にたい」イエスはエジプトから輸入したビールを飲み干し、空になった容器を壁に叩き付けて割った。

話してみな」

ユダに促されてイエスは話した。

相手は高級娼館で松の位の花魁、アンナという少女だった。イエスより二歳上の十七歳。馴染みになって逢瀬を重ねるうち、将来を約束し合う仲になっていた。しかしアンナはパレスチナ土着民の出身でイザヤの奴隷だ。一緒になるためにはアンナを買い取らなければならない。イエスはカネを貯めることにした。アンナは一万タラントあれば大丈夫だろうと言った。娼館のおかみも、二人の真剣さを認めて、総額一万タラントで話をつけようと請合ってくれた。それが三ヶ月前のことだ。

イエスはくだらない遊びを止め、酒も飲まなず、神の子劇場のシヨーにも欠かさず出演してカーテンコールで投げられる「おひねり」を溜め込んだ。多くても一タラント、ふつうは五ドラクマくらいの小額だが、きちんと全部貯金箱に入れた。ファンから受け取った花束は裏口から持ち出して隣の花屋に引き取らせた。これもなかなかの稼ぎになった。

ヨセフとマリアに話をしてカネを借りることも考

「ほら、今ひとつの命が死んだ」ユダが言った。

「僕は何も殺しじゃない」

「ビールのコップさ。コップだって割られたくなかつたろうよ。ま、こんなことを言うとか教義に反するがね」ユダはニヒルに笑った。

「コップも死ぬのか。面白い考えだけど、何の役にも立たないな。少なくとも今の僕には」

「そうかね。最近俺は居直ってるんだ。東洋の異教徒の本も読んでる。あのなあ、自分が考えることが絶対なんだぜ。ビールのコップが考えるかどうかはわからないが。とにかく誰も邪魔できないって知るべきだな。うだうだ言っただけで自分で考えて、いいと思うことをすりゃいいんだ」

「自分の力じゃどうにもならないことは？」

「あ、わかった、イエス、お前振られたな」

「振られちゃいないさ。振られたほうがどれだけましだか」

「相手は誰だよ。こういうときイザヤの息子は力になれる。黒幕のご子息だからね」

「本当かい？でも無理だ。相手はイザヤだから」

「ほお、そりゃ面倒だ。でも、どうということか一応

えた。そうすれば即日で一万タラントのカネができる。しかしイエスはいやだった。両親はカネを貸す代わりに、一日三回のステーションに必ず出ることや、シヨーの内容が飽きられないように新しいイリュージョンを発明すること、たまには生誕記念館にも顔を出し、ゲリラライブをすることなどを約束させるに決まっているからだ。そういうのが嫌いだから逃げているのだが。

僕は神の子だ。一万タラントくらい自力で稼いでみせる。必死の努力で、三ヶ月目には五千タラント溜まった。あと三ヶ月、手間取っても半年後にはアンナと結婚できる。その希望だけで生きていた。

きのう、久しぶりにアンナを訪ねた。喜んでくれるとばかり思っていたイエスは、アンナの絶望の涙を見て驚いた。アンナは「もう私たちはだめです。私のことなどあきらめてください」と言うばかり。紅涙がベッドを濡らした。

泣きじゃくるアンナをなだめすかして、やっと聞き出したのは、イエスにとっても身の凍るような話だった。アラビアの王族がアンナを見初め、イザヤから買い取る約束をしたという。金額は二万タラン

ト。明日の夕暮れにはカネが届き、アンナは馬車で出発する。そう決まったと言っただけだ。

どうしよう。希望は断たれ、すべての道は閉ざされようとしている。アンナをさらって逃げるか？ いや、ベンダサンを敵に回したら、世界中どこにいっても探し出される。アンナと心中するか？ アンナは死ぬだろうが、神の子の自分は生き残ってしまうかもしれない。心中は危険だ。一番良い方法は、アラビアの王族に代わってアンナを今すぐ買い取るかどうか。そのためにはあと一万五千タラント。

まず街の高利貸しへ行った。一万五千タラント必要な理由を話し始めると、高利貸しはイエスを制して「何に使うかなど聞きたくない。何が担保なのかを聞きたい」と横柄に言った。「それに、あんたはまだ十五歳だ。いくら神の子で経済的な信用はゼロだ。神は俺に金貨をくれないものな。もし金貨をくれる羊がいたら、俺はその羊に貸すよ」と笑った。腹が立ったが、これが現実だろう。他人はあてにできない。

家に飛んで帰って、イエスは母に一万五千タラント貸してほしいと話した。イブは良いとも悪いともはないはずだ。イエスはもう一度最初から考え直してみた。

問題は、強欲で溜めたカネはカネなのか、という点だ。罪の匂いが付いたカネでもカネなのか、ということでもあった。高利貸しやイザヤなら「カネに違いはない」と言うだろう。しかし、もしそうなら、強欲の罪はどう断罪されるのか。端的に言えば、イザヤのカネも父のカネも、それをカネと認めれば、彼らの愚かな強欲をも認めることになる。

それでは、彼らのカネをカネと見ないで盗んだとしたら、彼らの強欲を罰することになるのか、それとも自分が盗みの罪に問われるのか。寝不足の頭では結論が出なかった。

イエスは酒場に飛び込み、強い酒を次々と注文し、何故かわからないが泣いて暴れていたのだ。

ユダは話を全部聞いてくれた。そして言った。「簡単だよ。そんな難しいこと考えなければいい。アンナを助け出したんだろ？ お前は男じゃないか。やったれよ。盗みでも何でも」

言わなかった。あきれた顔をして「女郎なんか沢山いるだろうに」と呟いただけだ。次にイエスは父に話した。アダムは「貸してやらんこともないが、いつ、どうやって返す？ 無論利息も付くよ」と言い、「なあ息子、カネというのは増やすために使うんだ。小便女郎に入れ揚げるためじゃない」そして、行ってしまった。

そういうことか。イエスの怒りは頂点に達した。これだけ真剣に困っているのに誰一人助けてくれないのか。たかがカネで済む話じゃないか。ようし、盗めばいいんだ。強欲で貯めたカネがどこかにあるなら、それを盗んでも罪にはならないだろう。カネを永遠に寝かせておくことこそ罪ではないか。カネは使つてこそ生かされる。それも、善良な使い方で。イエスはその晩、まんじりともせずに一万五千タラント盗み出す計画を練った。

そして今日、夜明けにごく短時間居眠りをしただけでイエスは起きた。さあ、盗みの実行だ、と思つた瞬間、心の中から「ちよつと待て」という声が聞こえた。思いがけない躊躇に、イエス自身戸惑った。何が障害なのだろう。自分の判断のどこにも間違い

急いで神の子劇場に戻ると、一回目の開演まであと三十分になっていた。楽屋は、第一部に出る四十八人の『美少女』で溢れ、そのうるささは八千の悪魔がくすぐり合っているようだ、あの知能ブスども、幸せすぎるのか嫉が悪いのか。父は容姿だけでなく性格と知的レベルも考えるべきだ。イエスは第三部に出る自分のスタンドインを探し出し、今回は自分が出るからと家に帰した。

楽屋の奥の事務所に隠し金庫があるのはわかっていた。そして、金庫の鍵は机の引き出しだ。父のずぼらさに感謝しながら、意を決して一万五千タラントちようどを取り出し、自分の五千タラントと合わせた二万を皮袋に入れた。一刻も早くイザヤに届けようと、劇場の下足番の爺さんに、「必ずイザヤ本人に渡してくれ」と使いを頼んだ。

第三部までは時間があるが、出演者は出番が終わるまで楽屋で禁足だ。ライブなので何が起るかわからない。第二部の役者に不都合があつて、第一部の後にいきなり第三部になったことも過去にはあつた。イエスは外に出られず、楽屋で下足番の爺さんが帰ってくるのを待っていた。

「行ってきました。イザヤさん本人に渡しました」
酒臭い息を吐きながら爺さんが言った。イザヤに駄賃でも貰ったのだろう。イエスは少し安心した。

第三部は無事に終わった。おひねりを拾うのも忘れてイエスはベンダサン商会に走った。着替えもしていなかったので、ステージ衣装の白いトローガに麻のベルトを着けたままだった。

とても上機嫌なイザヤ本人がイエスを迎えた。「偉いですね君は。催促もしないのにお金を持ってきてくれた。たしかに二万タラント領収しました」

「それで、アンナは？」

「はて、何を言っておいでかな。アンナとは誰ですか？」

「アンナですよ。今日の夕方、エジプトに出発するはずの」

「ああ、娼館の奴隷ね。予定が早まって、昼過ぎには出て行きましたよ」

そんな馬鹿な。イエスは天と地が入れ替わったように感じ、その場に倒れてしまった。

「おやおや、誰か水でも持って来ておくれ」

イエスはイザヤの事務室に運ばれた。

「二万タラントはアンナを買い取るためのお金です。今からでも呼び戻してもらえないでしょうか」

「なんだ、そういうことでしたか。少々手遅れですね。すでに契約は履行されましたから」

「キャンセル料でも何でも払います。どうか戻してください」

「無理です。商人は契約で仕事をしています。いったん交わした契約を反故にするのは商道德が許しません。それに、もし仮に今キャンセルしたら、総額の少なくとも三割のキャンセル料が発生しますよ。それから、為替や手形の組み換えなどで数千タラントの手数料がかかります。ざっと三万タラント以上。払えますか？」

「あなたは何故お金のことしか言わないんですか。僕はアンナを愛してるんです」

「それは気の毒に。しかし君もアンナを買い取ろうと、お金を用意したでしょ？ 二万タラント分だけアンナを愛していたんですか」

「愛もお金に換算するとは。今まで少しは尊敬していました。それもこの瞬間に消えました。そういう

う人を相手に交渉するなど、僕にはできません。わかりました。それじゃあ二万タラント返してください。あれは盗んだお金なんです」

「これは困った。神の子が盗みをしたんですか。でも、お返しできません。あの二万は君の父上が未払いにしていた藁の代金として領収しましたから。お貸ししてからもう十五年になりますかね。隣人なので利子も付けず、催促もせずに待っていたんですよ」

「えっ、そんなこと僕は知りません。父の借金なんて、父から受け取ってください」

「ええ、私はそのつもりで受け取りました。だって劇場の爺さんが『イザヤさんに受け取ってほしい』とだけ言って持ってきたんですから。それにピツタリ二万タラントでしょ。誰だって貸してあった藁の代金だと思っじゃありませんか」

「そんな無茶苦茶な。まるで泥棒だ」

「いえ、私は泥棒ではなく商人です。神の前に出ても恥じることのない商人です」

「そうでしょうとも。商人なのを恥じることがありません。でも、商売の内容は大いに恥じるべきです。あなたは神をも恐れぬ手前勝手な道徳しかお持ちで

はない。人の命を平然と売り買いで、自分は高枕で安眠する。よくそんなことができますね」

「いいですか若い人、よく聞きなさい。兵隊の命はカネで買えます。女郎の命もそうだ。牛や馬も金で買える。ほとんどのものはカネとしての価値を持っているんです」

「人間を牛や馬と同じに考えるのは、どうしても間違っています」

「間違っていないよと、どうだろうと、それが世界なんです。私を恨んでも始まりません。私が世界を作ったわけではないのだから。そういう世界に私は生まれてきただけですから」

「世界がどうであれ、カネで人間を操るのは悪いことと思いませんか。そんなにまでして、カネで人間を操りたいのですか。権力を買いたいですか」

「それは違うな。私がカネを貯めるのは権力が欲しいからではありません。自己防衛なんです。自分と自分の民族を守るために、他の方法がないから仕方なく貯めている。まことに致し方なくです。君も知っているでしょうが、私たちは神に選ばれた唯一の民族であり、独自の文化と宗教を持っています。」

私たちがそれを守ろうとすればするほど、世界のどこにいても、他民族のコミュニティに入れてもらえない。溶け込ませてもらえないのです。異教徒はみな驚くほど狭量なんですよ。あるいは私たちの文化を怖がっているのかもしれないが。その結果として、私たちには『良き隣人』など存在しなくなりました。私たちが困っても誰も助けてくれない。だから私たちは、もうだいたい昔から他人に救いを求めるのをやめました。無駄だからです。助けを求めただけ醜態を晒すことにもなる。その代わり、財力を持つことで世界と対抗することにしたんです。財力を持つていけば、心の底ではどうであれ、どの異教徒も私たちを軽視できなくなる。わかりますか？だからカネはいくらあっても足りるということはありません。カネはいくらでも貯めるべきなんです。どんな小さなチャンスでも、金儲けに使わなければ、自らの民族に対する、また私たちの神に対する罪になります」

「僕もそんな民族の一人というわけですか」

「もちろん。私と君とは同じ民族の血が流れていますからね」

「はつきり言いましょう。それは嫌悪すべきことだ。僕とあなたとは同じではない。あなたの理屈はほぼ全部被害妄想だ。コミュニティに入れないのを、どうして他の民族の狭量のせいにするんですか。入れてもらう努力はしたのか？理解してもらう活動はしたのか？順序が逆なんです。良き隣人がいないからカネを頼むという。でも、カネにだけ頼っているようでは真の隣人などできっこないじゃありませんか。まず真っ先に自らが良き隣人であるべきなんです。自らがそうであれば他人は自然と私たちを助けるでしょう。そうなればカネなど不要です。あなたの論理には本末転倒を覆い隠す汚らしい毒がある。僕の体に、そんな人と同じ血が流れているはずはない。あなたの血はカネにまみれた黄金色か、さもなければ嘘で染められた闇のような黒に違いない」

「ほう、この私に楯突くつもりですか、幼子イエスよ。しかし口だけなら何でも言える。私の血の色が人間のそれでないというなら、いっその胸を切り裂いて、確かめてみたらどうでしょう。君に、そんな度胸はないですね」

「度胸はあるさ」

イエスは短刀を抜き、イザヤの胸に銀の刃を突き立てた。吹き出た血は赤かった。しかしイエスには真っ黒に映った。



☺ ここまで読んで、各界のコメント ☺

【おかあさん談】
ホントにもう、また書いたんですね。責任上読んでみましたが、これ結構面白い。結末をきいてもタマは教えてくれなんでしょう。親不孝な子です。

【ピンキーことジャガ談】
あたしは編集委員に入れてもらえなかったの。理由は知らないよ。でもいーんだ、イエスのファンクラブ作ったから。あたし、会員番号一番、やったー。

【マサネコ談】
理屈が通りゃあ正しいってもんでもねえでしょう。義理と人情忘れた屁理屈は白いドスを赤くしまさあ。僭越ながら、この若いのは悪かねえ。

【カッチャン談】
そうか、やっぱりネコワニか。そんな昔から住んでたなんて恐竜並みだな。こんだあネコワニの化石探そうぜ。タ、口、ついてくるだろ。





著ネコ近影
思考中



DVDをつなぐハナポチ (ホテル・シオンにて)



偽神紀 其の一

発表日
イラン暦 1393年 Farの月 19日
フツの西暦では 2014年 4月 8日

著ネコ：蔵小路タマ (イラストも)
仕方なく著作権管理させてる人：大塚明

いないだろうけど、転載するときは管理人に言ってね。黙ってやったらヒッカク！



なんかねえ、昔も今も全然変わらなくなって思うよ。人間はネコほど進化してないんだ。今でも何千年前とまったく同じことしてるじゃん。これ書いた人(ネコかも)は、一応配慮してか、それともお話に一般性を持たせるために、ユダヤ教とかユダヤ人とか、一言も書いてない。ベンダサン商会がロスチャイルドに似てるのも書いてない……なんてアタシが書くとかヤボかもねえ。

イザヤとアダムの口喧嘩、問題の本質がどんどんズレてく。まるでテレビのニュースみたいでおかしかったよ。わあわあ騒ぐだけで何にも解決しないで、結局、最初に仕組まれた『結論』になっちゃうわけ。とにかく解決したんだから、まあいいか、みたいになって、それ以上誰も追及しない。さて、最後に儲けたのは誰でしょう？

人間って忘れっぽいのかな。ひどい目に遭っても、また同じパターンでひっかかる。ネコは違うよ。一度蹴飛ばされたら、その人のこと一生忘れないからね。だから人間は、どこまでネコ的かで失敗せずに出世できるかどうかが決まるんじゃないかと思う。少年イエスがどれだけネコっぽいかわ、其の二を読めばわかるよ。

んじや、またね。

タマ